

霊地を巡る女人

——『とはすがたり』の道行^{みちゆき}と伊勢——

阿部 泰 郎

天照大神の伊勢鎮座縁起と倭姫命巡幸をめぐる中世神道テキストの諸位相

伊勢の地へ御杖代としてアマテラスを奉載し巡幸したヤマトヒメの旅は、古代の成立に仮託された中世神道書『倭姫命世記』（神宮文庫蔵、応永二五（一七七八）年写本）に詳しく叙述される。それは、いわば中世に仮想された齋宮もしくは齋内親王の伊勢巡幸の原型を提示するものであった。本書は、奥書に「大治二年雅晴」識語と「丁卯歲章尚」識語を有し、「大神主飛鳥孫御氣」の書写になると記されている。また、神護慶雲二年に称宜五月麻呂撰集の仮託識語を有する。『書紀』神武東征と日本武尊東征を枠組みとして垂仁紀の倭姫命による伊勢鎮座記事を増幅展開させ、「大神宮本紀」の一部として構築されたものである。倭姫が夢に導かれ、度会氏祖神の大若子命に助けられ大田命に案内されて五十鈴川上の地に至り神宝を見いだすまでの経緯を詳述する。そのなかには、外宮の鎮座縁起がはじめから組み込

まれて一体化している。基本的に年代記の体裁をとるが、末尾に裏書や一書の記事を加えるなど勘注的な装いを施している。それは鎌倉中後期に成立した外宮度会氏による伊勢神道の神典として、その核にあたる倭姫命の託宣をもつて教説宣布を企てたテキストであった。

この『倭姫命世記』の周囲には、同じ主題をめぐる、多様な位相の中世神道テキストが伝存しており、それらは『世記』を相対化すると共に、中世の巡幸するヤマトヒメを介した伊勢神宮の始源のイメージをさまざまな角度から映しだしている。たとえば、『倭姫命世記』を神典の文字テキストとすれば、物語の文字テキストとして『天照太神御天降記』があり、また神道秘伝―図像テキストとして『二所天照皇太神遷幸時代抄』、礼拝―説話図像テキストとして『伊勢両宮曼荼羅』が挙げられる。このような中世神道テキストの諸位相の分節化は、中世宗教テキスト全般において等しく認められる普遍的な布置に共通しており、その典型ということができる。

『天照太神御天降記』は、称名寺旧藏尊経閣文庫蔵鎌倉中期鈔阿写本と真福寺蔵貞和二年印隆写本が存する。本文はまず、

「例ノ言語（モノガタリ）ノ様ニ」天照大神の高天原での天岩戸神話と天降つての倭姫による伊勢鎮座神話を叙述する。その後半は、巡行記を交え神宝投下―宇治土君（翁）による発見と宮処定め、大物忌（大古良）祭祀の起源および拔穂神事起源の真名鶴神話などを説くのが中心。内宮鎮座縁起として完結し、大中臣氏荒木田氏の祖神のみを登場させ、外宮豊受宮の事は末尾に付加されるに過ぎない。末尾に神宮鎮座記録を付記する。

『三所天照皇太神遷幸時代抄』は、真福寺藏南北朝時代写本がある。本書は、勝賢が伝授した守覚編「三宝院御流」聖教の一部である「野決内」具書の一つである。本文は『倭姫命世記』の抄出か、もしくはそれが拠った更に古い本文を伝えるもの。倭姫命の巡幸部分を中心とし、両宮の神体図、三種神器図と遷幸した各地宮処の図および社殿造図を中心とする図像集といふべきものである。『麗氣記』に先行すると思われるが、遷幸図は類例を見ない。また、密教秘事口伝類聚の一環として伝来したテキストで、両部神道書として密教図像の周縁に位置する。

『伊勢両宮曼荼羅』（正暦寺藏、鎌倉末から南北朝の制作、紙本着色二幅）は、内宮・外宮幅とも社頭図像を中心に四天王を周囲に配し、社殿上に日・月輪を貼り付けて御正体図像とする。遠景として内宮は熊野山と神島、外宮は二見浦と与佐中山を上方に描く。その社頭景観中に縁起絵のモチーフを加え、内宮は鏡宮、御裳濯河の辺りに神鏡を奉戴した「大和姫」を案内する獵師姿の「山神」を描き、真名鶴を配す。外宮は与佐中山に降臨する天女達を描き、そこに「山神」を配す。また、両宮に法楽舎と「狐狼（子良）館」の存在を強調して、鎌倉末期の「鼻

鼻書」『天照大神口決』の世界と重なる。それは、後世の伊勢両宮参詣曼荼羅とは異質な、掛幅縁起絵―社頭図としての曼荼羅である。講などの儀式、法楽を通してこれを拝する者が、社頭に臨んで縁起に説かれる霊地と降臨や影向の霊験を体験することも含んで、参詣を遂げることになる。

二

異端の中世女流日記『とはすがたり』における修行者尼二条の大神宮参詣をめぐる旅

中世に伊勢へ参る女人の旅を自ら記すテキスト、それが後深草院二条の『とはすがたり』である。それは、前節に述べたヤマトヒメを巡る中世伊勢の諸テキストが生み出されたのと、同じ時代のことであつた。久我雅忠の女として後深草院の寵幸を蒙りながら、同時に宮廷の貴顕に愛されその子女を設け、やがて何ら身分を与えられることなく追放されるに至る前半（巻一―三）から、一転して出家遁世の尼となつて諸国を修行する旅を中心に記す後半（巻四・五）は、あざやかな対照をなしている。その旅は、幼い頃に見た「西行が修行の記といふ絵」により萌した憧れゆえと説明され、院の宮廷に別れを告げ、妻子を捨て出家し遁世の修行者として物語・説話の主人公となつた西行の先蹤を逐うように己の生涯を象る。そうした二条の旅が目指す霊地トゴスの最大の焦点が伊勢の「大神宮」である。

伊勢をめぐる二条の軌跡について、その関わりは既に前半の宮廷時代に示唆されている。巻一で後深草院が母大宮院を訪れ

た際、そこで前斎宮であつた異母妹愼子内親王に「密通」するという大胆な行為に及ぶ。その手引をつとめ、一部始終を目撃したのが二条である。父がこの斎宮に仕え、その伊勢下向を沙汰したゆかりから「道芝」したものである。院の前斎宮への「犯し」は、『伊勢物語』狩の使段に做つた色好みであると同時に、いまだ治天としての実権を持たなかつた院の、弟亀山院より優位に立つべく禁忌を侵すことによる示威を企てたものと推察される。

二条の、無名の尼としての旅は、巻四における正応二年から四年にかけての伊勢を軸とした東国および奈良への旅と、およそ十年を隔てた巻五における、まず叡島を目指した西国への旅の二つに分かたれる。前者は、東国最大の霊場である善光寺への参詣が旅路の極みにあり、後者は叡島と南海の足摺岬がそれにあたる。また、前者では京の宮廷を支配する鎌倉幕府という武士の権門中枢に赴き、そこで親王將軍の交替という大事に立ち会い、それを操つた権力者たちと交わつてゐる。後者では、備後の田舎地頭の家へかどわかされたも同然に訪れて、あやうく下人の身に取り籠められそうになる。つまり当時の武士社会の上から下までを身づから経験するのである。

その冒険的なまでの旅は、しかし決して流離・漂泊という表現には当たらぬ能動的なものである。將軍惟康親王の「王殺し」といふべき追放劇を間近で見物し、新將軍（後深草皇子久明親王）の下向を迎え、その御殿のしつらいと女房装束の故実指南をつとめるのは、いかにも院御所の元上臈女房として自由に立ち廻ることの出来る役割であつて、それは何か宮廷からの特命

を負つたはたらきとみえる。しかしその一方で、由比ヶ浜では八幡若宮を望んで小野小町の「壮衰」を己に重ね、乞食流浪する伝承像を今生の果報を断念した自身の境涯としてゐる。あるいは善光寺参詣において、一行と別れひとり留まる際に、敢えて生ずるも一人死ぬも一人と仮名法語もどきに弁ずるなど、その旅は伴する者があつた（江の島の段りで言及）にもかかわらず、あたかもただ一人孤独な道行きを辿るかのよう書きなしている。それが、このテクストの上でのあらまほしき彼女の旅であつた。

旅の前半の最も焦点となるのが、伊勢参宮であるが、その伊勢をめぐる、二条が再三再四立ち戻つて参り、また修行の目的である「宿願」を遂げる場でもあつたのが、熱田宮である。その経緯を略述してみる。

初度は東下り（鎌倉下向）の際に、尾張が父の知行国であつたゆかりから、深く熱田神を仰いだ父が、最後の病に奉つた神馬が頓死し、「受けぬ祈り」であつたというエピソードが想起され、特に心をこめて詠歌を社前の桜に結んだ。その景観を殊に賞でゐる。二度目は東国より帰洛の際、ここで宿願の華嚴經の書写を行うため用意をしたが、大官司に妨げられ遂げられず断念する。一方、「津島の渡りといふ渡りをして」大神宮へ参ろうとする修行者たちに逢い、参宮に心惹かれたことを述べる。三度目は奈良巡礼を了え、石清水参詣で院と邂逅したあと、宿願を果たすべく参詣し、通夜の折に「神火」により社殿炎上し、その焼跡から草薙劔が出現する奇瑞と、焼け残つた「御記文」による縁起を見聞する。この中で「御記文」として特筆さ

れる草薙劔つまり宝劔縁起は、中世の神話つまり「日本紀」において最も重要な主題に他ならない。これを敢えて二条自らが見聞するように書き為したのは、報告すべき務めを負っていたからであろう。この後で、先に示された「津島の渡り」をして伊勢参宮に赴く。その間に、院より伝言がある。四度目には参宮のあと、再建中の宮において漸く宿願の写経を営み、その供養を何の作法も知らず弁舌もない田舎法師ながら導師と頼んで遂げ、ともかくも果たした。そして帰洛後、いよいよ院の召しに応じて参上する。

伏見御所での院との対面は、回想の態で院の問い（何故一人で身を苦しめながら修行を続けるのか、旅の行く先々で扶持されたり契った相手が居るだろう）に應えて、全くそのような相手は居ないことを参詣した仏神にかけて誓っている。なおも院は（都では昔の好みを戻した相手が居る筈と）疑う。これに答え、もし虚言すれば自らの修行の功德が「三途の菟」となり地獄に墮ちよう、と己の潔白を誓言する。この「祈請詞（申状）」に、院はようやく己の非を認め、二条の誠を受け入れる。この伏見の一夜が前半巻四の旅のクライマックスであり、それを受けて、院から何らかの給付のあったこと、それにしても自らが然るべき待遇を受けた覚えのないことを述懐する。そして再び、伊勢に旅立ち、その途上、笠置寺を過ぎるところで巻四の記述は中絶している。参宮の折、再訪を約しており、それを果たすことが志向されているが、それが遂げられたかどうかは明らかにされない。むしろ初度の参宮とその記こそが『とはずがたり』の主眼であった。

二条の参宮記において、彼女が関わった神宮の祢宜のうち最も注目すべき人物が、まずはじめに出会った度会行忠（当時三祢宜、五五才頃）である。行忠は伊勢神道の創唱者であり、「三部書」等の神典の述作者と目される（真福寺にはその一つで行忠自筆の『大田命訓伝』一巻が伝来する）。やがてその数年後には、「皇字沙汰」一件において内宮とくりひろげた訴訟の主役を演ずることになる人物である。

外宮に赴いた二条は、神館の辺りに徘徊していると、鳥居の下で二三人の神官に親しくもてなされ、また祢宜がしるべして、参拝を遂げる。後に聞けば、それが行忠であり、案内したのは常良（歌人でもある）であった。彼女はその礼として詠歌を木綿・四手に書き榊枝に付けて遣わす。それから参籠し「生死の一大事」を祈請する。当時の参宮する僧尼にとって勤行法楽の場であった法楽舎に念誦し、帰途に尼の住む観音堂に宿を借ろうとするが拒まれ、そこで「世を厭ふ同じ袂の墨染を……」と詠み、南天の枝に四手に付けておくと、尼は宿を許し、それより知己となったという。これは西行と江口遊女の歌問答と同巧異曲で、あきらかにその逸話をふまえたふるまいである。

内宮祠官の側では、この歌詠みで由ありげな尼の噂を聞き、数寄者どもが待ち受けていた。誘いとして祢宜の後家からの文が二条の許にもたらされ、応酬の末にようやく参詣に臨む。御裳濯河の川上より遙拝し、望見した宮造りの故実に言寄せて院の「玉体安穩」を祈る。そこでの詠歌は、「君を千代と折る」のであり、述懐には「神風すごく音づれて、御裳濯川の流れものどかなるに、神路の山を分け出づる月影、ここに光を増すら

んと覚えて」と、明らかに西行参宮の折の詠「神路山月さやかなる誓ひありて 天の下をば照らすなりけり」をふまえたもの。神拝のあと、一祢宜尚良の館へ訪れるが応接なく、またしても詠歌を四手に書き櫛に結んで去る。その歌は「月をなどその光と隔つらん さこそ朝日の影に住むとも」と、暗に内外両宮の不和を諷して、外宮でもてなされ、そこから訪れた妾を無視するのと言わんばかり。尚良は早速返して、気づかなかつたのは老いの眠りゆえと并明し、宗信神主にしるべさせ二見浦の遊覧で饗応する。(嘗ての倭姫の巡幸の如き、そして西行も歌に詠んだ) 舟遊びの島巡りには、小朝熊の宮(鏡明神)の縁起靈験が語られる。大宮司の宿所にて過ぐすところへ、祭主の縁者という得撰照月より院の文が遣わされる。

再び外宮に戻り、常良に「あり果てん身の行末のしるべせよ 憂き世の中を度会の宮」の歌を贈り、自らのしるべを頼む。また内宮の尚良からは、九月の齋会の折に招待されたのに応え、「行く末も久しかるべき君が代に 又帰り来ん長月のころ」と院への祝言に併せ、再び参宮することを約す。それを遂ぐべく、院との対面の後にまた伊勢へ赴いたというのであらう。

参宮のあと、いよいよ宿願を果たすため、前述の如く熱田宮へ赴き、写経し、供養を形の如く成就する。この間、後深草院の宮廷では、院の皇女(のち永陽門院)に熱田神(草薙劔と日本武尊の一体化した如き神格)の託宣があり、時の朝廷の処遇を非難し、故に神火を出したと告げる。神意を慰めるために院は今様をうたい読経を行う。

二条の宿願は、巻五、旅の後半、四国白峰の崇徳院御墓松山

法花堂にて、はじめてそれが五部大乘経の書写と供養であることが、そこで西行の崇徳院展墓の詠歌「よしや君」が想起されると共に明かされる。それは「流され王」として此地で死んだ崇徳院の血書五部大乘経―その願文にこの功力で自ら魔王となり世を滅ばし王を民となすと誓ったという―が強く意識されている。

二条にとつての五部大乘経は、彼女に恋慕した院の異母弟、御室法親王であつた有明の月(性助)が「大願」として彼女の「文」を書き籠めた五部大乘経である。有明は、それを供養せず、己の死と共に煙となして龍宮へ送り、その功德で再び共に人界に男女と生まれ契つた後に供養するという。それは「よしなき妄念」に衝き動かされた輪廻の作業である。彼の死と同時にその企ては発動され、二条は今生どころか来世まで妄執に捕らわれる身となつた。加えて、全てを知つた上でこの関係を許し、決して実ることのない不毛の契りを支配した院の上にも、その呪いは及ぶものであつたらう。これを解除するには、自らも五部大乘経を写し、供養を遂げなくてはならない。ゆえに二条(とその父母)の後世ばかりでなく、院の「玉体」とその死後の魂の行方にも関わらず「宿願」なのであつた。

二条が描いて見せた、彼女自身の流離は、伊勢参宮をそのひとつの焦点として結ばれる、諸靈地の(聖なるもの)を一身に背負おうとする遍歴である。もちろん単なるヤマトヒメの再現ではない。むしろ、より複雑ないくつもの伝承像を重ねあわせた上で演ずる女人の道行きなのである。

伊勢をめぐる二条の旅は、かくして、孤独な流離を装い、西

行の如くふるまいながら、ひたすら院の「玉体安穩」とその皇統の「行末」の長久を祈るための営みとして描かれている。その後、巻五では、西国への旅から帰った後、院の崩御と葬送を見送り、追善仏事の営みを聴聞しつつ、最後に熊野那智山で宿願写経の結願に至り、夢中で神殿から院の出御に对座し、その仏神にも等しい玉体が、五体不具の「かたは」であった因縁は、「苦の衆生」に代らんとための代受苦の本誓ゆえであると父に告げられるのである。その証として神の御正体たる扇を感得し、これを再び参詣した石清水で邂逅した院の忘れ形見遊義門院に奉り、己の思いと志をいささかなりと晴し遂げることになった、として院の三回忌の仏事に臨んで筆を擱くことになる。

さきに挙げた中世神道テキスト―伊勢神宮の創始とヤマトヒメの巡幸をめぐる諸位相のテキスト群に対して、『とはずがたり』は、それら宗教テキストとは異なる、あたらしい地平に立っている。それは、中世に現れた、参宮記という、僧尼の側から彼らの参宮を拒む神宮に「推参」し、法楽を営み、その神威を顕わし、あらたな神祇と仏法の関係を創りだす儀礼の過程をメモリアルな記録とする。思想テキストの一環なのである。二条のテキストは、ヤマトヒメならぬ自らの流離を語り、巫女にして西行の如きふるまいの上に重層的なコンテキストを包摂する運動といえよう。

注(1) 大隅和雄校注『中世神道論』日本思想体系所収(一九七七)。

(2) 阿部「中世宗教テキストの世界像」『日本文学』57-7(二〇〇八)。

(3) 阿部解題・翻刻『中世日本紀集』真福寺善本叢刊第一期第7巻所収(一九九九)。

(4) 伊藤聡「阿部神道集」真福寺善本叢刊第一期第6巻所収(一九九九)。

(5) 阿部「書かれたものとしての神道」コロンビア大学「中世神道」シンポジウム報告(二〇〇七) 英文はB・フォーレル編「フランス極東学院紀要」所収(二〇一〇)。

(6) 奈良国立博物館特別展示図録『神仏習合』所収図版(二〇〇七)。

(7) 西山克「鶴と酒甕―正暦寺本「伊勢曼荼羅」と縁起」『日本文学』41-7(一九九二)。

(8) 阿部「霊地莊嚴の声―中世を往還する声わざ人たち」『中世歌謡研究』39(一九九九)。

(9) 岡田莊司解題・翻刻『伊勢神道集』真福寺善本叢刊第二期第8巻所収(二〇〇五)。

(10) 阿部「熱田宮の縁起―『とはずがたり』の縁起語りから」『国文学解釈と鑑賞』63-12(一九九八)。

(11) 阿部「『とはずがたり』の王権と仏法―有明の月と崇徳院」『王権の基層へ』叢書史層を掘る、第3巻、新曜社(一九九二)。

(12) 阿部「『とはずがたり』と中世王権―院政期の皇統と女流日記をめぐるて」『日本文学史を読む』Ⅲ、有精堂(一九九三)。